「全く」について
―川端康成の小説を対象に―

陳　連　浚

はじめに

本稿は、「全く」を対象に川端康成の小説の実例からその使用文脈の特徴を考察するものである。

日本語の品詞の中で、修飾語といわれる副詞について、動詞などの研究に比して、立ち遅れているところがあるといわざるを得ないことが現状であろう。特に、表現主体の態度の表明を表すものといわれる陳述副詞について、まだ分からない領域が多い。その原因は何であるかと言うと、それは、陳述副詞について、その種類が豊富で複雑であることが、研究の遅れを引き起こす原因の一つであろう。これまで、陳述副詞について、代表的と言える研究には、例えば工藤浩（1983、注①）、田中敏生（1983、注②）、森本順子（1994、注③）、永尾章曹・松浦純子（1996、注④）などがある。工藤は陳述副詞の一部として、いわゆる敍法副詞について、たとえば「必ず」「きっと」「ぜひ」などに対して、検討をしている。田中は「対象面」と「作用面」の視点から、「全然」と「決して」の違いなど、詳しく説明している。森本は話し手の主観的／心理的態度を表す副詞群（ＳＳＡ）を取り上げ、その内的構成を分析した。永尾は文脈の立場から、志賀直哉の作品に使われる「全然」と「全く」の特徴について、示唆的な考察をした。このように、分析の対象を十分価値のあるものに絞ってやっていくことは適切なやり方であろう。緻密な研究を積み重ねて、十全な研究結果が期待できると思われるので、今回は永尾の考察をふまえてあまり注目をされていない「全く」について、考えてみることにする。

なお、考察の対象にした新潮社刊行の『川端康成全集』には、「全く」の用例数が443例にものぼっている。考察の便宜上、「一文の文末部にかかり、それで一文が完結している場合」（注⑤）のものだけをとりあげることとし、その他の場

合はこれからの課題とする。

一

「全く」が用いられている例文には、このようなものがある。

1　「だけど君は、君子の言葉に驚いてやつて来たぢやないか。」

「うん。—ところが、君子を見て一層驚いたね。僕は君の奥さんを描かして貰ひたいよ。あの人の体の明りをね。全く君のいふ、純粋に一人の女といふ感じの明りだよ。」

「今度は君子が君の絵を描くのかい。君が君子を描くのぢやなくて—。」（或る詩風と画風）

2　彼女等は獣のやうに、白い裸で這ひ廻つてゐた。

脂肪の円みで鈍い裸達—ほの暗い湯気の底に膝頭で這ふ胴は、ぬるぬる粘つこい獣の姿だつた。肩の肉だけが、野良仕事のやうに逞しく動いてゐる。そして、黒髪の色の人間らしさ—全く高貴な悲しみの滴りのやうに、なんといふ鮮かな人間らしさだ。（温泉宿）

3　氷か水か、眩しい湖水の輝きで見分けがつかない。

さうして、スケエトを見に廊下へ出ると、俄かに粉雪が舞い上つて来た。全くそれは、地面や屋根に積つた雪が、風に吹かれて飛ぶかと見える、降り方だつた。（牧歌）

これらの例文では、「全く」が用いられるところの前にすでに話の「材料」を得ている。例えば、例1では、「全く」の前にすでに「あの人の体の明り」というものがあった。「明り」に対して説明を加えるところに「全く」が用いられている。これと似たように、例2では、「全く」の前にすでに「黒髪の色の人間らしさ」というものがあった。「全く」はこの「人間らしさ」に対する説明のところに使われている。

このような場合、「全く」を使うことによって、話の流れはそこで前進しないまま、前にすでにあった話の中から材料を選んで説明を加えることがその特徴だと言える。「全く」は表現主体の「強い」気持ちを示すものであろう。

二

例1、2、3に似ているが、川端康成の小説の実例には、次のような実例もある。

4　今日お画をいただいてから、いつものやうに賑かに話してお部屋に帰り、海水着に着換へようとしてゐると、

お姉さんが突然―全く突然なんですの。

「早く結婚すると、ひとの結婚のことなんぞ気にならないわ。」ですつて。（ナアシツサス）

5　「それを、その時も女学生に聞かれてね、わたしは困つた。はじめは相手も可笑しがつてゐたからいいが、利口な娘が一人ゐてね、先生、どうして私達にものをおつしやつて下さらないのですと言つたかと思ふと、突然大きな声で泣き出すぢやないか。全く突然泣くんだ。こちらは本物の唖ではないから、この不意打ちに会ふと、うつかり言葉を出してしまひさうだつたね。」（百日堂先生）

6　ところで諸君、その弓子だが―このあたりまで書いて来た時に、私は奇怪な姿の弓子に会つたのだ。そこで、この小説も急に航路を変へなければならなくなつたのだ。

小説を船にたとへたが、全く船なのだ。―隅田川汽船株式会社、例の一銭蒸気の乗合なのだ。（浅草紅団）

例えば、例5では、「突然大きな声で泣き出す」ことが取り上げられるところの直ぐ後に、「全く」を用いることによって、「突然泣く」ということを強めて表現している。例6では、譬えの話でまず「船」のことを持ち出して、「全く」を使って、もう一度「船」に言及して、それなのだとその表現を一層強くする。この場合、共通しているところといえば、「全く」がその繰り返して提起される言葉に付けられることによって、表現主体のその認識を一層強めるということであろう。

「全く」の機能を理解するには、まず以上のような特徴を無視してはならないだろう。つまり、前の話の流れの中から何かを選んでわざわざもう一度持ち出してそれを取り立てる。そこに「全く」がよく用いられる。

三

例文の形式が一定していないが、川端康成の小説の実例を読むと、「全く」がかかわる表現には、次のようなものもかなり多い。

7　「先日あんな会ひ方をして、話を打ち切つたにもかかはらず、僕はもう一度君に会つて、君を負かしたいと思つてゐた。もう結婚しないでもいいほど安心してゐるといふ君の言葉には、僕も全く同感だ。だが、これが結婚しないといふ理由には、決してならない。その反対だ。」（むすめごころ）

8　侘住居ながら、楽しい世帯の世話女房と見えた。顔は少し荒れてゐるけれども、頬が赤いし、大きい眼が生き

生きしてゐるし、肌がきれいだし、形にいい体に円みがあつて、変な工合に上りこんだ私をなごやかにさせてくれるものがあつて、私は全く不思議だつた。こんな女に苦労させてるらしい辻本に、義憤を感じたほどだ。（以下略）（浅草祭）

9　（僕はお前と一緒にゐるのだつたら、こんな言葉は匂はせもするものではない。しかしお前は僕が去つてからは、北見を室長に、菊川、浅田と同室ださうだ。菊川、浅田は僕のゐる時分から、舎の美少年として上級生の注目の的になつてゐた。それに北見はしっかりした五年生ではなく、四年生のひよろひよろだ。室員を護る力があるか。僕は全く心配した。そしてお前も上級生の醜い—僕は醜いと書く勇気がないけれど—醜い要求にぶつつかるか、または菊川、浅田がぶつつかるのを見たと思ふから書くのだ。（以下略））（少年）

例えば、例7では、「君の言葉」に対して、「僕」は「同感」であることを示すところに、「全く」が使われている。例8では、あの女の容姿と「変な工合に上りこんだ私をなごやかにさせてくれるものがある」ことに、私の「不思議」な感触を「全く」を用いて強く表現している。例9の「心配した」も含めて、このような場合、「全く」の働きとしては、表現主体の感じていること、認識していることを強く示すということであると言えるだろう。

四

10　「全く」のもう一つの特徴として、次のような例文もある。

その夏から秋にかけて、私は二人の女から感情を要求された。その一人は文学好きの娘だつたが、手紙を寄越してから自作の小説を持つて訪ねて来た。ちやうど友達が二人居合せたし、私はその女の少し濁つた眼のあたりに押し潰された色情的な感じがずんぐり沈んでゐて不愉快だつたので、余り相手にしないでゐると、友だちとの話を黙つて聞いただけで帰つて行つた。家庭の監督が厳しいらしいのも私には馬鹿馬鹿しいことだつた。彼女の小説は恋人にすてられた女の呟きのやうなものだつたが、非常に美しい真実が流れてゐた。それから一月ばかり後、彼女は突然、今いろんな縁談があるけれども皆断つてあなたと家庭を持つのだといふやうなことを、力強い断定的な調子で書いて寄越したので、私は全く驚いた。

もう一人は女の画家だつた。（以下略）（明日の約束）

11　「なにがわからないの。」

「なにもかもよ。気まぐれなのかしら。気むづかしい

のかしら。日曜日のおひるに、テレビでファッション・ショオがあつたの。前にいつしよだつた人も出てるし、なつかしくて見てゐたら、英夫がいきなり足でコオドをはづしてしまつて、もうたいへんな機嫌の悪さなの。夕方ひとりでドライヴに出かけてしまつたりするの。今日もこつちへ来ないから、うちに早くもどるのか、あたしが出てゐるから、おそくまでお友だちと遊んでしまふのか、まつたくわからないのよ。」（風のある道）

12　「そりや私だつて、菊田さんのお嬢さんが、菊田の店を再興なさるつもりなら、一肌脱ぎますよ。あの時、みな死にの、あなたと私だけが生き残りですもの。敬子さんはお嫁に行つてゐて、私は戦争に行つてゐて、助かつた—とは言つてもね、まつたくひどかつたなあ。」（東京の人）

以上の例文では、いずれも話が区切りを付けるようなところに、「全く」が見られる。例えば、例10では、一人の女の話を述べ続けて、その終わりのところに「全く」が用いられている。「驚いた」というのは、前に述べたこと、つまり彼女が書いた小説を寄越したことに対する反応と言ってもいいだろう。例11では、「なにもかも」のことに対して、「わからない」という考えを示して、そこにも「全く」が用いられている。

このように、さまざま、一つではないことに対して、表現主体の反応が話の流れの終わりにあるところに出ている。そこに「全く」が使われることはその共通点であろう。

五

永尾氏の考察によると、「全く」の特徴に「後件が特に取り立てられている」ということがある。川端康成の小説の実例を読むと、確かに似たようなものもある。例えば、次のような例である。

13　母は早枝が小学生の頃になくなつてゐた。母は足が悪かつた。道へ出歩く母を、早枝は覚えてゐない。

その母の夢を見た。

母の夢を見ることは、早枝には決して珍らしいことではなかつた。そして、（中略）

「お母さん。」

半ば眠り、半ば目覚めてゐる時の、心の純な幼さは、身も心も消えてゆく歓楽に似てゐた。早枝はこんなにも母を愛してゐる自分に満足しながら、純な幼い眠りに落ちてゆくのだつた。

ところが、今度の母の夢は、いつもと全くちがつてゐた。

「早枝が一生のうちに、大勢の男といつしよにゐられるのは、小学校きりなんだよ。ですから、男達をよく見るお稽古をしておくんですよ。一目でその男がどんな男だか分るやうにね。」

夢が破れた時に覚えてゐたのは、そんな風な母の言葉だけだつた。いつもの涙は目尻になかつた。（水仙）

14 ……三月八日、舎を去つてから日々鬱々としてゐましたが、彼岸の桜の咲く春の暖かさと共に、気分が全く新しく蘇つたやうになりました。心の底から楽しい楽しいといふ感じが泉のやうに湧いて出て来ます。滝の音、風の声、すべてが私を楽しくしてくれます。私が今までに味はつた楽しみよりも、遙かに遙かに高く勝つた楽しみです。私が前に楽しみとしてゐたのは、写真の現像や、ぼんやりとガラス窓から外を眺めることでしたが、今は全く趣を異にしました。ただ滝の音にあこがれ松風に慕ひ、神諭に耽るのがなにより楽しく、そしてかうして天地の間に暮らさせていただいてゐるのに、どうして日々厭世的に暮してゐることが出来ませう。（以下略）（少年）

15 夢がさめた時は、相手が誰か、よく分つてゐたやうだ。それから一眠りした今朝も、相手が誰かを、知つてゐたのかもしれない。ところが夕方の今は、もうまつたく思ひ出せない。（山の音）

志賀直哉の例文とは同じではないが、ここでも川端康成の小説の実例の特徴を見出すことが出来る。例えば、例13では、「今度の母の夢」と「いつも」の母の夢を対比させるところに、「ところが」が存在することを無視してはならないだろう。これと同じで、例14の「が」、例15の「ところが」も似たような働きをしていると言えよう。「今度の母の夢」と「いつも」の母の夢と、「前に楽しみとしてゐたこと」（写真の現像や、ぼんやりとガラス窓から外を眺めること）と今の「楽しみ」（滝の音、風の声など）と、「夢がさめた時」「今朝」と「夕方の今」と、それぞれ対比されている。後件が「全く」を用いることによって、取り立てられている。

終わりに

川端康成の小説にある「全く」の用法は、志賀直哉の作品にある「全く」の用法とは以上のように似たようなところもあれば、異なるところもある。まとめていうと、「全く」が用いられる例文には、いろいろなパターンがあるが、いずれも「全く」を用いることによって、表現主体の気持ちが一層強くなってくる。このように具体的な言語の材料を使って、その実体を明らかにしていくことは表現研究の基本であろう。

ここで「全く」が用いられる文の脈絡から、いくつかの特徴を検討してきたが、数から見ても分かるように、これは「全く」の特徴のわずかな一部である。まだ触れられていないところは実にたくさんある。それはこれからの研究課題としたい。

注

① 「叙法副詞の意味と機能」『国立国語研究所報告71』

② 「否定述語・不確定述語—作用面と対象面」『日本語学』

③ 『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版

④ 『「全然」と「全く」について—陳述の副詞についての一考察』『安田女子大学国語国文論集（第二十六号）』この中で永尾氏が志賀直哉の作品を対象として、「全く」について、つぎのようにまとめられている。

(1) 「全然」が強調を役割とするのに対して、「全く」は決着を役割とする。

(2) 二つのことを対置して、それを対比することによって、後件が特にとりたてられている。

(3) 筋の流れの終わりにあるいは組合せの後の方に、つまり行き着く先となるところに「全く」が見られる。その後に一言加えられることがある。

⑤ 永尾氏が『「全然」と「全く」について』で取る考察の原則に従う。